国際日本学研究所

Ⅰ　2022 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2022 年度大学評価結果総評】（参考）
国際日本学研究所が行ってきた、布の交流についての研究会やインドネシア出身の研究者の発表会などを含む総合的な活動は、国際的に認知される国際日本学という学際的分野の研究の発展、および文献等の資料や人的交流の拡大の証しとして、高く評価できる。 ただ、こうした研究活動の拡大・発展に欠かせない財源をどう確保するのかについて、2021 年度も科研費の応募・獲得などの成果に努力の跡がうかがわれ、それ自体大いに評価できるものの、十分な活動に必要な財源はまだ十分でないことがうかがわれ検討すべき課題は大きい。 国際日本学研究の日本学というキーワードに何を盛り込んでいくのか。人文分野に限らず広く社会科学や自然科学分野への拡大をいかにはかっていくのか。その検討と実践を通じて、各分野相互の連携・交流の要石として、国際日本学研究所がさらに発展していくことを期待したい。
【2022 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】
本研究所では、これまで人文分野の調査研究に重点を置いてきたが、今後は社会科学分野の専任所員を中心に社会科学分野の研究をすすめることができる。また、理系分野の所員との研究交流もはじめている。

Ⅱ　自己点検・評価

1　教員・教員組織

（１）点検・評価項目における現状

1.1　教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

1.1①研究所（センター）において研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。	はい
1.1②上記項目で【はい】と回答した場合は、研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための取り組みの実績（開催日・テーマ・参加人数等）について記入してください。	
随時運営委員会席上で、所員で話し合っている。	

2　教育研究等環境

（１）点検・評価項目における現状

2.1　研究倫理を遵守するための必要な措置を講じ、適切に対応しているか。

2.1①研究所（センター）として研究倫理の向上及び不正行為の防止等について、公正な研究活動を推進するための適切な措置を講じていますか。	はい
【根拠資料】	
大学が実施する研究倫理の研修を受けるよう、研究員に呼びかけている。	

3　研究活動

（１）点検・評価項目における現状

3.1　研究所（センター）の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

3.1①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等） ※2022 年度に研究所（センター）として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。
１　本学 大学院 国際日本学インスティテュートとの連携強化に向けた説明会

※　回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

開催日：　2022 年 4 月 16 日(土)
場所：　法政大学 大学院棟
実施形式：対面
テーマ：　本研究所の紹介
説明者：　髙田圭（本研究所専任所員）
内容：「国際日本学合同演習 I（授業担当教員：椎名美智教授)」の一環として説明会を実施。
説明内容は下記の通り。
（１）本研究所 学術研究員の制度について
本学大学院博士後期課程在籍者を本研究所学術研究員として委嘱する制度について説明。
（２）若手研究者論文について
応募資格及び採用論文は本研究所研究成果報告集『国際日本学』に掲載されることを紹介。
（３）フランス・アルザス地域で開催される国際ワークショップについて
若手研究者による国際ワークショップについて紹介し，参加を募った。
（４）国際日本学インスティテュートと本研究所との連携の可能性について
a 研究会等の共同開催
b 本研究所主催研究会等への招致
c 本研究所の研究成果報告集『国際日本学』への論文投稿 等

２　研究会「異世界に魅せられる――江戸時代後期における海外の古物との邂逅」

開催日：　2022 年 6 月 14 日(火)
実施形式：オンライン(Zoom)
内容：本研究会では，オランダのライデン大学講師マルガリータ・ウィンケル氏を招き，江戸時代後期（18～19 世紀）当時，日本とオランダにとって異世界であった相手国の様々な情報を両国の所蔵資料と人々が邂逅することで好古趣味的な関心を深化させ，世界的な拡がりをみせた事例を紹介した。
参加者：22 名
報告者：マルガリータ・ウィンケル(ライデン大学地域研究所講師・国際日本学研究所客員学術研究員)
司会：　小林ふみ子（法政大学文学部教授・国際日本学研究所兼担所員）

３　国際交流基金と本学 ESOP 共催イベント「エズラ・ヴォーゲル氏と考える日本研究の未来」

開催日：　2022 年 7 月 16 日(土)
場所：　法政大学 市ヶ谷キャンパス 外濠校舎 S405 教室
実施形式：対面
内容：本イベントでは，国内外の日本学研究者や日本学に関係する学生，機関等と国際交流基金との連携及び国際交流基金の推進する日本研究の認知度向上をはかること等を目的に，国際交流基金が公開した，日本研究界の巨人であるエズラ・ヴォーゲル氏のドキュメンタリー映像を，法政大学で Global and Transnational Japan 受講生にご覧いただき，日本研究支援に従事している国際交流基金スタッフ と，日本研究のあり方や意義について議論した。
参加者：12 名
（本学 ESOP 授業「Global and Transnational Japan」受講生，国際交流基金

※　回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

職員他）
コメンテーター：
マックス・ワード（ミドルベリー大学准教授・国際交流基金フェロー）
アレクサンドラ・ローランド(デュースブルグ・エッセン大学博士候補生・JSPS 外国人特別研究員)
運営・司会： 国際交流基金 日本研究部
司会者： 髙田圭（本研究所専任所員）

４ 研究会「女性たちの源氏物語 － 翻訳が促す再(差異)解釈 -」

開催日： 2022 年 9 月 28 日(水)
場所： 法政大学 市ヶ谷キャンパス 大内山校舎 5 階 Y504 教室
実施形式： 対面及びオンライン(Zoom)
内容： 本研究会は，日本古典文学の翻訳実績が多いツベタナ・クリステワ氏の「第一回古典の日文化基金賞」受賞を記念し，開催した。研究会では『源氏物語』を取り上げ，現代語訳および外国語訳を比較した結果，「注釈」が，和歌の特徴である「曖昧さ」をなくす傾向にあることを議論した。本研究所では，2018 年度以降，「国際日本学」の研究対象を他の国・地域へ広げる研究活動を行っており，当会の開催後は，本研究所の研究員 複数名による研究会「外から見た和歌(仮題)」を開催し，「和歌」をテーマとした研究活動を展開させていく予定である。
参加者：39 名
報告者：ツベタナ・クリステワ（国際基督教大学名誉教授・法政大学国際日本学研究所客員所員）
司会： 小口雅史（法政大学文学部教授・法政大学国際日本学研究所兼担所員）

５ アルザス・ワークショップ「日本のトランスナショナリズムと帝国」

開催日時： 2022 年 11 月 4 日（金）9：00 ～ 11 月 6 日(日) 23：30 （日本時間）
主催： 法政大学国際日本学研究所（HIJAS），「国際日本研究」コンソーシアム（CGJS），アルザス欧州日本学研究所（CEEJA）
場所： アルザス欧州日本学研究所（コルマール／フランス）
実施形式： 対面及びオンライン
テーマ： 日本のトランスナショナリズムと帝国
内容： 本ワークショップでは，トランスナショナリズムを軸に日本を「帝国」との関係で探る事例研究を若手研究者から募集し，発表を通して理解を深めた。併せて，日米欧における日本研究へのアプローチの違い等についてディスカッションを展開した。
参加者： 40 名
基調講演者（学外 2 名）：
酒井 直樹（コーネル大学教授／アメリカ）
ミカエル・リュケン（国立東洋言語文化大学教授／フランス）
コメンテーター（11 名／学内 2 名・学外 9 名）
ジョゼフ・キブルツ（フランス国立科学研究院(フランス)／国際日本学研究所客員所員）
サンドラ・シャール（ストラスブール大学／フランス）
黒田昭信（ストラスブール大学／フランス）
髙橋希実（ストラスブール大学／フランス）
エーリヒ・パウエル（CEEJA／フランス）
レギーネ・マチアス（CEEJA／フランス）

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

坪井 秀人（早稲田大学文学部教授／国際日本文化研究センター名誉教授）
小口 雅史（法政大学国際日本学研究所兼担所員,文学部教授）
安孫子 信（法政大学名誉教授／国際日本学研究所客員所員）
髙田 圭　（法政大学国際日本学研究所専任所員,任期付講師）
鈴村 裕輔（名城大学外国語学部准教授／国際日本学研究所客員所員）
若手研究者（8名／本研究所所員1名・学外7名）
Ghamini Amin（大阪大学人文学研究科講師）
Mascio Paola（国際日本学研究所客員学術研究員）
Shimomura Anna（大阪大学人文学研究科博士後期課程）
Aresin Jana Isabel（Friedrich Alexander University／ドイツ）
Mavropoulos Nikolaos（Hanse-Wissenschaftskolleg-Institute for Advanced Study／ドイツ）
Nakamura Kimihiko（Ruprecht-Karls-University／ドイツ）
Rückert Jasmin（Heinrich Heine University／ドイツ）
Sakata Tomoki（Otto Friedrich University／ドイツ）

6 研究会「現代マンガ研究と伝承文学研究―『鬼滅の刃』竈門禰豆子をめぐる神話的モティーフ―」

開催日：　2022年11月26日(土)
場所：　法政大学 市ヶ谷キャンパス 外濠校舎 S405教室
実施形式：対面
内容：本研究会では,2021年に著書『鬼滅夜話 キャラクター論で読み解く『鬼滅の刃』』（扶桑社）を刊行した植朗子先生を招き，主人公の妹である禰豆子 固有の特性に焦点を当て，伝承文学的な独特の世界観をもつ『鬼滅の刃』を伝承文学研究の視点から解説した。日本の漫画・アニメは国内外で人気だが，研究方法が確立しておらず未知数の部分が多いのが現状であり，2022年2月26日開催の研究会「海外に普及した日本のアニメーインドネシアにおける『NARUTO-ナルト-』の受容ー」に続き，研究方法を探った。
参加者：45名
報告者：植 朗子（神戸大学国際文化学研究推進インスティテュート協力研究員）
コメンテーター：鈴村裕輔（名城大学外国語学部准教授・法政大学国際日本学研究所客員所員）

7 勉強会「恋と情ー堀景山と本居宣長を中心にー」

開催日：　2022年12月17日(土)
場所：　法政大学 市ヶ谷キャンパス ボアソナードタワー 19階 D会議室
実施形式：対面及びオンライン
内容：本研究会は，日本とアジアの文化・思想に関する研究報告会・ディスカッション等の研究活動を行っている勉強会「琥珀会」(世話役：国際基督教大学 小島康敬名誉教授）と法政大学国際日本学研究所の共催にて，勉強会「恋と情ー堀景山と本居宣長を中心にー」を行った。
参加者：22名
報告者：小島康敬（国際基督教大学名誉教授）
司会：　大野ロベルト（法政大学国際文化学部准教授・国際日本学研究所兼担所員）

3.1②対外的に発表した研究成果（出版物、論文、学会発表等）
※2022年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者（当研究所関係者は下

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

線付記)、内容等)、論文（著者（当研究所関係者は下線付記)、タイトル等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者（当研究所関係者は下線付記)、内容等）の詳細を箇条書きで記入。

１．出版物等

（１）研究成果報告集『国際日本学』第 20 号（2023/2/10 編集・発行：国際日本学研究所）

a　研究成果報告

(a)『インターナショナルからトランスナショナルへ―国際日本学の新しい展開―』（安孫子信）

(b)『トランスナショナルな日本研究に向けて』(髙田圭)

(c)『昭和の室町問屋と職人たち―友禅とイノベーション―　』(岡本慶子)

(d)『石橋湛山はなぜ政界への進出を志したか―戦前の言論人としての活動を手掛かりに』(鈴村裕輔)

(e)『オランダの「日本美術協会」創成期と Edzard Johan Modderman の役割』(堀咲子)

b 特集「日本研究とトランスナショナリズム」(第 4 回アルザス・ワークショップ/2021 年度国際新世代ワークショップ)

(a)『特集「日本研究とトランスナショナリズム」に寄せて』(高田圭)

(b)『文学におけるトランスナショナリズムとその変容―在日朝鮮人文学を一例として―』(吉田安岐)

(c)『異人が来たのは海の彼方―江戸時代における漂流民の国際文化交流―』(ダニラ・カシキン)

(d)『縁取られる日本―近代日本史の周縁から―』(山本敬洋)

(e)『森有正の渡仏に見る西欧と日本』(古賀通予)

c　書評

(a) 米家志乃布著『近世蝦夷地の地域情報―日本北方地図史再考―』(2021 年 5 月)法政大学出版局（佐々木利和）

（２）米家志乃布『地理学事典』日本地理学会 ロシア圏研究 丸善出版 2023/02/01

（３）米家志乃布『新・江戸東京研究の世界』法政大学江戸東京研究センター編 第 3 部 都市の表象文化「名所と視覚的経験 - 江戸東京の風景 - 」205-223 頁 法政大学出版局 2023/01/10

（４）高澤紀恵『王のいる共和政--ジャコバン再考』中澤達哉（編）終章「「名乗ること」と「名指すこと」--フランス近世史から」岩波書店 2022/06/28

（５）堀川三郎 『環境社会学事典』 環境社会学会（編）（編集委員および執筆者）丸善出版 2023/03/30

（６）横山泰子『＜怪異＞とミステリ』第１章 歌舞伎と探偵小説　青弓社 2022/12

２．論文

（１）髙田圭『トランスナショナルな日本研究に向けて』(研究成果報告集『国際日本学』第 20 号，21-45 研究論文 2023/03)

（２）髙田圭『特集「日本研究とトランスナショナリズム」に寄せて』(研究成果報告集『国際日本学』第 20 号，131-137 総説・解説 2023/03)

（３）『A Limited Consequence of the Japanese Sixties Movements: A Failure of Progressive Neoliberalism? 』(International Conference “ Issues and Perspectives in the Study of Social Movement Impacts” 1-18 研究論文（国際会

※　回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

議プロシーディングス）単著 Institute of Citizenship Studies, University of Geneva, 2022/05/26）
（４）小林ふみ子『江戸文芸のなかの外来者―方言と視点と』2023/01　EToS 叢書 4『新・江戸東京研究の世界』43-56 単著法政大学出版局
（５）堀川三郎　『コミュニケーションから応答へ：フィールドワークにおける「失敗」と省察』2022/09/30 社会と調査 29, 5-11 研究論文（学術雑誌）単著社会調査協会
（６）堀川三郎『受益圈・受苦圈论的理论构成及当下意涵』2022/06 夏多曼・朱安新（译）学海 2022 年第 3 期, 12-20 研究論文（学術雑誌）単著
（７）大野ロベルト『ことほげ、言葉の壁を』2023/01/27 週刊読書人 3474, 5-5（MISC）総説・解説（商業誌）単著 週刊読書人
（８）大野ロベルト『私が選ぶ国書刊行会の３冊』2022/11 国書刊行会創業 50 周年記念小冊子 26-27（MISC）総説・解説（商業誌）単著 国書刊行会
（９）大野ロベルト『白鳥の歌（変ロ長調）』2022/10/28 週刊読書人 3462, 5-5（MISC）総説・解説（商業誌）単著 週刊読書人
（10）大野ロベルト『「王朝」と地続きの桃源郷』2022/09 ちくま 618, 18-19（MISC）総説・解説（商業誌）単著 筑摩書房

３．学会発表等

（１）髙田圭「国際日本学の第三の波？ー日本を超えて日本と捉える手法と対話ー」日中若手研究者フォーラム 2022/09/24-2022/09/25 口頭発表（招待・特別）
（２）髙田圭「Cosmopolitan Publics: A Transnational and Relational Approach」"Making Sense of the Worlds" Thai Sociology and Anthropology Graduate Students Network's Annual Convention 2022/06/17 口頭発表（基調）
（３）小林ふみ子「主体の虚構性と実体性――大田南畝周辺から」神戸大学文学部国語国文学会 2022 年度研究部会 シンポジウム　近世俗文芸の作者の〝姿勢（ポーズ）〟――序文を手掛かりとして 2022/08/26-2022/08/27 シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）
（４）米家志乃布 戦前日本における「千島」表象 歴史地理学会大会　滋賀大学 2022/05/20-2022/05/22 口頭発表（一般）
（５）西塚俊太 三木清『哲学入門』はいかなる哲学への入門であるのか 比較思想学会 2022 年度 12 月東京例会 2022/12/10 口頭発表（招待・特別）
（６）堀川三郎 コロンビア大学大学院ワークショップ A Workshop on _Why Place Matters_ with Prof. Horikawa 023/03/02-2023/03/02 公開講演, セミナー, チュートリアル, 講習, 講義等
（７）堀川三郎 なぜ保存するのか：観光開発のパラドクスと保存の論理　日仏会館シンポジウム「フランスと日本における産業遺産とその活用：歴史学的、社会的、経済的視点」2022/11/18-　2022/11/19 シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）
（８）堀川三郎　歴史の中の「運河論争」：小樽運河とまちづくり・再考　小樽市制 100 周年記念事業 第 50 回小樽市民大学講座 2022/10/13 公開講演, セミナー, チュートリアル, 講習, 講義等
（９）横山　泰子 江戸東京の川と妖怪シンポジウム「川のエコヒストリーとスピリチャリティ～江戸東京の都市構造と精神性～」2022/08/11 口頭発表（基調）

４．その他　特になし

3.1③研究成果に対する社会的評価（招待講演、書評・論文の引用等）
研究所（センター）の活動に対して 2022 年度に得たと考える社会的評価（招待講演等）を記入してください。招待講演が学会発表の場合も重複してこちらに記入してください。※注

※　回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

１　書評
（１）西塚俊太 板橋勇仁『こわばる身体がほどけるとき――西田幾多郎『善の研究』を読み直す』 田中久文『西田幾多郎』2022/06/01 西塚俊太『実存思想論集』37, 206-209

２　受賞
（１）ヨーゼフ・クライナー（国際日本学研究所客員所員，ボン大学名誉教授）
第４回人間文化研究機構日本研究国際賞受賞（2022 年 10 月，大学共同利用機関法人 人間文化研究機構）
　当賞は，海外を拠点として，日本に関する文学，言語，歴史，等の人間文化研究において学術上 特に優れた成果を上げ，日本研究の国際的発展に多大な貢献をした研究者を受賞の対象としている。

3.1④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）
※2022 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

外部評価委員の人選が難しいことにくわえ、コロナ禍であるため行っていなかったが、現在前向きに検討中である。

3.1⑤科研費及びその他外部資金の応募・獲得状況
※2022 年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金及び 2022 年度中に採択を受けた科研費等外部資金について、研究担当者（代表・分担の別）、研究種目、事業名、実施年度、交付金額の詳細を箇条書きで記入。

１．2022 年度中に応募した科研費 14 件

（１）研究代表者 6 件

・堀川三郎 基盤研究(B) 都市開発計画の日米比較社会学：公共事業の見直しと「減築」をめぐって 総額 8,269 千円
・大野ロベルト 基盤研究(C) 近現代における土佐日記の受容に関する研究：多言語・多文化の視点から 総額 2,738 千円
・赤石美奈 基盤研究(C) 執筆状況の定量化に基づく論文執筆支援環境の構築 総額 2,870 千円
・大澤ふよう 基盤研究(C) 現代英語の冠詞は何故「特定性」ではなく「定性」で文法化されたのか：習得の困難性 総額 2,650 千円
・岡本慶子 基盤研究(C) インクジェット捺染のデザインイノベーション 総額 4,873 千円
・髙橋洋子 若手研究 高橋五山の紙芝居と児童雑誌・漫画との接点の解明および今後の紙芝居発展への取り組み 総額 3,728 千円

（２）研究分担者 8 件

・小口雅史 基盤研究(B) 日本海交易と宗教ネットワークから見た歴史的幹線の再発見
・小林ふみ子 基盤研究(A) 場所の記憶とその地図情報の活用一新・江戸東京研究による近未来東京のデザイン
・小林ふみ子 基盤研究(C) 江戸時代中・後期の風景表現に関する基礎研究
・米家志乃布 基盤研究(A) 場所の記憶とその地図情報の活用一新・江戸東京研究による近未来東京のデザイン
・松本剣志郎 基盤研究(B) 江戸東京移行期に関する総合的研究 ―時間論・空間論からのアプローチ―

※　回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

・西塚俊太 基盤研究(B) 近代以降の日本における「幸福」概念の特性の解明、およびその学際的・国際的応用
・横山泰子 基盤研究(C) 日韓中妖怪絵本比較による異界観研究を題材とした日本語学習者向けの日本文化教材開発
・山中玲子 基盤研究(B) 前近代日本における廃墟の文化史

２．2022 年度中に採択を受けた科研費 26 件

（１）研究代表者 14 件

・髙田圭 国際共同研究加速基金(帰国発展研究) 日本のコスモポリタンな６０年代運動における第三世界とのつながりとその意義 2020-04-01 - 2023-03-31 760 千円 (18K19957)
・小口雅史 古代末期防御的集落の実態解明と中世移行期日本北方世界を含む北東アジア史の再構築 2019-04-01～2023-03-31 2,150 千円 (19H01297)
・小林ふみ子 基盤研究(C) 江戸狂歌資料による大衆的作者=読者の教養の研究 2020-04-01～2025-03-31 600 千円 (20K00298)
・ 米家志乃布 基盤研究(C) 近代日本のアートと地理空間ーメディア表象とパブリックアート体験にみる都市と地方 2022-04-01 - 2025-03-31 300 千円 (22K01051)
・高澤紀恵 基盤研究(C) 近世フランスの教区の動揺と絶対王権ーーパリの事例から考える 2020-04-01 - 2025-03-31 700 千円 (20K01063)
・大野ロベルト 若手研究 『土佐日記』英訳に関する基礎的研究 2019-04-01 - 2023-03-31 全年度総額 2,080 千円
・大塚紀弘 基盤研究(C) 資料調査に基づく日本中世における渡来人の基礎的研究 2019-04-01 - 2024-03-31 600 千円 (19K01001)
・松本剣志郎 基盤研究(C) 近世都市インフラ維持管理の社会史的研究 2018-04-01 - 2023-03-31 (18K04545)
・山中玲子 特別研究員奨励費 世阿弥伝書のデジタル写本の作成および書承・伝播・受容の分析 2021-04-01～2024-04-01 400 千円 (21F21702)
・山中玲子 特別研究員奨励費 世阿弥伝書のデジタル写本の作成および書承・伝播・受容の分析 2023-03-08 - 2024-03-31 100 千円 (22KF0344)
・山中玲子 基盤研究(A) 能の「ことば」の包括的・領域横断的研究に向けたオンライン・リソース構築 2021-04-05 - 2025-03-31 2,430 千円 (21H04350)
・宮本圭造 基盤研究(B) 近世大名家道具帳の網羅的収集とデータベース化を通じた古典籍伝来の文化史的研究 2020-04-01 - 2025-03-31 1,100 千円 (20H01234)
・山本真鳥 基盤研究(C) オセアニア植民地時代における非白人移住者の歴史人類学的研究 2019-04-01～2023-03-31 400 千円 (19K01208)
・鈴木多聞 基盤研究(C) 占領下の宮中グループの戦争観と平和観 2019-04-01～2024-03-31 6,000 千円 (19K00993)

（２）研究分担者 12 件

・髙田圭 基盤研究(B) 「顔の見えない定住化」再考：周辺部労働とグローバル化の都市間比較
2022-04-01 - 2026-03-31 700 千円 (22H00909)
・小口雅史基盤研究(B) 料紙分析の手法による中国古文書学の基盤構築とその応用 2020-0401～2024-03-31 430 千円 (20H01298)
・小林ふみ子 基盤研究(C) 高大連携による古典文学の探究型授業の教材作成と教育モデル構築の実践的研究 2019-04-01～2024-03-31 40 千円 (19K00530)

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

・小林ふみ子 基盤研究(C) 近世後期の好古・考証研究の源流と展開に関する学際的国際共同研究 2022-04-01 - 2025-03-31 200 千円（22K00863）
・高澤紀恵 基盤研究(A) 共和政の再検討：近代史の総合的再構築をめざして 2021-04-05 - 2026-03-31 250 千円（21H04365）
・高澤紀恵 基盤研究(B) 16、17 世紀のスペイン複合国家における公共善をめぐる多元的ダイナミズム研究 2020-04-01 - 2025-03-31 350 千円（20H01337）
・高澤紀恵 基盤研究(C) 近世フランスの軍隊社会に関する基礎的研究 2018-04-01 - 2023-03-31 全年度総額 4,150 千円（18K01023）
・大野ロベルト 基盤研究(B) 視覚・聴覚等に障害をもつ人の英語能力の測定法の開発 2020-04-01 - 2025-03-31 250 千円（20H01289）
・赤石美奈 基盤研究(C) 音楽的分析のための能楽の謡の多層的なモデル化 2020-04-01 - 2023-03-31 50 千円（20K00136）
・山中玲子 基盤研究(C) 音楽的分析のための能楽の謡の多層的なモデル化 2020-04-01 - 2023-03-31 50 千円（20K00136）
・山中玲子 基盤研究(C) 古代・中世日本における廃墟の文化史 2020-04-01～2023-03-31 1,430 千円(2022 年度:総額) （20K00337）
・宮本圭造 基盤研究(A) 能の「ことば」の包括的・領域横断的研究に向けたオンライン・リソース構築 2021-04-05 - 2025-03-31 100 千円（21H04350）

３ 科研費以外の外部資金
特になし

※注 社会的評価に該当するその他の例として、研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対する 2022 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2022 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等も含む。研究所（センター）に該当するものがない場合は、研究所に所属している所員によるものを含めることも可、その場合は研究所の研究領域に関係する論文や刊行物等とする。社会的評価の対象となるものが論文や刊行物等である場合、それらが公表された時期については問わない。また、実績等は把握できている範囲で記入。

Ⅲ 2022 度中期目標・年度目標達成状況報告書

評価基準		研究活動
中期目標		「国際日本学」という研究分野の存在が広く認知されてきたことを受けて、対象分野を拡大充実させ、特に「現代日本」の研究を本格化させていくことを目指す。国際日本学研究と深く関わる、国内外の他の機関との連携をさらに強化する。
年度目標		従来の「国際日本学」研究をさらに推進するとともに、新しい研究分野として「現代日本」に関する調査研究を行う。
達成指標		研究対象および連携研究者の増加
年度末報告	執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	「現代日本」をキーワードとした研究企画として、トランスナショナリズムや現代のマンガなどに注目したワークショップや研究会を開催することができた。対面でアルザス・ワークショップ「日本のトランスナショナリズムと帝国」を行い、国際交流基金をはじめとする国内外の他の機関との連携を強化できた。
	改善策	専任所員を中心に、対面での国際研究集会を開催することができた。この経験をふまえ、より連携研究者を増やし、活発な研究活動を展開したい。
評価基準		社会連携・社会貢献
中期目標		研究所からの情報は HP を通じ、広く、迅速に発信する。また本務に影響

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

		の出ない範囲で、マスコミや研究者からの所蔵史資料原本の閲覧希望に応じるようにする。
年度目標		本研究所自設 HP の英語頁の改修を行い、現在工事中のデータベースの再開を目指す。コロナ禍が終息せずとも、多くの市民参加が可能となるよう、適宜オンラインを活用した研究会を開催する。
達成指標		研究会への一般市民の参加者の増加。公開された刊行物の増加。現状のウェブサイトの再検討と改善
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	HP や SNS を通じた情報発信により、これまで本研究所の研究会に参加したことのない人達の参加を得られたのは評価したい。データベースの再構築・再公開が６月から始まり１月までにはすべてのデータベースの公開が完了した。再構築に約２年をかけたことになったが、安全な管理運営のために必要な時間であり、所期の目的は達成された。
	改善策	HP を通じて情報発信をするうえで、英語頁を充実する必要があるので、定期的に見直していく。２０２２年にはシンポジウムと研究会のうち、可能なものはオンラインでも行った。今後も内容に応じて、柔軟に対応する。

【重点目標】
「現代日本」に関する調査研究会を行い、新たな分野を開拓する
【目標を達成するための施策等】
専任所員を中心に、学内外の研究者とともに研究会やシンポジウムを開催する。

【年度目標達成状況総括】
専任所員を中心に学内外の研究者との連携をすすめ、国際研究企画を開催することができた。いずれも「現代日本」に関する調査研究会であり、新たな分野を開拓できた。

Ⅳ　2023 度中期目標・年度目標

評価基準	研究活動
中期目標	「国際日本学」という研究分野の存在が広く認知されてきたことを受けて、対象分野を拡大充実させ、特に「現代日本」の研究を本格化させていくことを目指す。国際日本学研究と深く関わる、国内外の他の機関との連携をさらに強化する。
年度目標	従来の「国際日本学」研究をさらに推進するとともに、新しい研究分野として「現代日本」に関する調査研究を行う。
達成指標	研究対象および連携研究者の増加
評価基準	社会連携・社会貢献
中期目標	研究所からの情報は HP を通じ、広く、迅速に発信する。また本務に影響の出ない範囲で、マスコミや研究者からの所蔵史資料原本の閲覧希望に応じるようにする。
年度目標	本研究所自設 HP の英語頁の改修を行い、情報発信につとめる。
達成指標	研究会への一般市民の参加者の増加。公開された刊行物の増加。現状のウェブサイトの再検討と改善

【重点目標】
昨年度の研究活動で導き出された現代日本を考えるうえでの重要なキーワード「トランスナショナリズム」研究を推進する
【目標を達成するための施策等】
専任所員を中心に「トランスナショナリズム」をテーマとした研究企画（シンポジウム、研究会）を行い、成果をまとめる。

※　回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

【大学評価総評】

国際日本学研究所では、多くの、研究・教育活動（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等研）、研究成果の対外発表（出版物、論文、学会発表等）を行った点が、高く評価できる。

研究・教育活動では、説明会 1 回、研究会 3 回、イベント 1 回、ワークショップ 1 回、勉強会 1 回を実施した。研究成果の対外発表では、出版 6 編、論文 10 編を執筆し、学会発表 9 回を行っている。また、ヨーゼフ・クライナー氏（国際日本学研究所客員所員、ボン大学名誉教授）が、第 4 回人間文化研究機構日本研究国際賞受賞（2022 年 10 月、大学共同利用機関法人 人間文化研究機構）を受賞した。外部資金では、2022 年度中に応募した科研費は 14 件、2022 年度中に採択を受けた科研費は 26 件であった。

自己点検・評価書類の記述内容は、ともすると個々の研究員の対応が中心のような印象を受けるが、哲学と歴史学と社会学の研究者が協働でアルザスでのワークショップを開催するなど、国際日本学研究所という組織があって初めて可能となる取り組みもあり、またその成果も国際的にも高い評価を受けてきたことについては、大いに評価されるべき事項である。

今後、COVID-19 禍から通常に戻る中で、禍中に得た経験も活かして、さらに高い水準の研究、教育が行われることを期待する。また、学際分野の拡充にも期待する。さらに、外部からの組織評価（第三者評価等）の導入に、取り組まれたい。

【法令要件やその他の基礎的な要件の充足状況の確認】

2023 年度自己点検・評価シートに記載された Ⅱ自己点検・評価（１）点検・評価項目における現状を確認	法令要件やその他の基礎的な要件が充足していることが確認できた
＜法令要件やその他の基礎的な要件が充足していない項目＞	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。